土を考える会

大規模でもより精密に

どんな物でも作れる畑と会社の能力を

北陸東海近畿 土を考える会　高木会長に聞く

「土を考える会」は、農業に対する圃場づくりや基本技術、機械化をテーマとして先進的農家が情報交換を行い、手弁当で研鑽を重ねる革新的な農業経営者組織だ。１９７８年の「北海道土を考える会」の創立から45年、本州各地で設立された有機物循環農法研究会などさまざまな変遷を経て現在全国６地区５００余名の会員が活動を行っている。現状は、第２・第３世代の時代となり、研究会も興味深い内容が多いことから若手農家の入会や参加が増えてきた。弊誌では全国６地区の土を考える会会長にご自身の農業経営や各地区での土を考える会の現状と今後について話を伺う。

最後となる今回は「北陸東海近畿土を考える会」の高木健一会長（50）に話を伺った。高木会長は岐阜県海津市の㈱サンフレッシュ海津の代表取締役だ。「いい土を作り、手間をかけて良いものを作るからこそ、良いお客さんに行きつく。確立した体系を省略せず増収を図りながら、低コスト化にはじっくり取り組みたい」と高木さん。

そんな同社は木曽三川の三角州から近い地域全体の約60％が海抜ゼロメートル以下の輪中地帯に位置。２２０㌶に及ぶ広大な耕作面積でありながら増収に向けた緻密な土づくりに向けて余念が無い。「灰色低地土の砂地で単粒構造になりやすいので、たい肥や緑肥替わりのコーンの茎葉を施用しながら４年６作の輪作体系を回すことで、団粒構造の維持に注力している。今後の農業情勢は先行き不透明なので、どんな作物でも作れる畑と会社の能力を確保したい。ビジネスパートナーが増え、さまざまなことが見える化できるようになってきたので、今後は一枚の畑の中での土質の変化を把握し、土壌特性を掴みそれに応じた処方箋に沿って作業することで本質的な適地適作を実現したい。それが一番の畑にとっての財産になるから」と話す。

サンフレッシュ海津の高木代表取締役

同社同様に複数台の〝Challenger〟を活用する、北海道栗山町の勝部農場の勝部征矢さんからはさまざまに薫陶を受けたとのこと。「二十歳の頃、勝部さんに『貯金は銀行ではなく畑にしろ』と言われても意味が分からなかったが、ようやくわかるようになってきた。物理性・化学性・生物性の改善をしながら土づくりすることで持続可能な土づくりしたい」と話した。

一方、ＩＣＴ利用にも積極的で増収への取り組みを加速する。「まずトラクタのロボット化を進めることで社員数はそのままに作業面積を倍に増やしたい。ザルビオでの衛星を通した情報やドローンでの定点観測など、リモートセンシングも活用していく。そして、先々はＡＩに置き換わるだろうけど、僕の生きている間は、現場を実際に見て感じる感性が特に大事だと思う」と話す。さて営農状況を見ると受託面積は昨年近隣の担い手が離農し一気に20㌶増加して２２０㌶（１９６枚）に。その全てが農地中間機構経由の借地となる。

ERMOディスクハローなど大型多数

作付面積は水稲91㌶、麦と大豆が各73㌶、馬鈴薯11・５㌶、キャベツ11・５㌶、子実コーン43㌶。４年６作で今年は米麦大豆コーンから、麦大豆と、米麦大豆の後にコーン馬鈴薯キャベツの２パターンで進める。「米麦大豆は土中有機質が減り土地が痩せていく。本当は緑肥を入れるのが良いが売上にならないので、輪作体系にコーンを組み込み有機物としてすきこんでいる。子実コーンは飼料の需要もあってよい」と話す。人員構成は役員３人と正社員４人（平均年齢40代）。常時シルバーの他、馬鈴薯とキャベツではパート20人を雇用。「馬鈴薯はうちの子供が好きだったこともあり作り始めた。米麦大豆は多くの方が取り組んでいるので、自社の特色として年中需要があるキャベツの契約栽培と合わせて作付する。選別作業のパートさんは熟練作業者が減ってきたので、支障が出る前に無選別も視野に入れたい」とも。機械保有状況はトラクタが２３８馬力のＣｈａｌｌｅｎｇｅｒ３台をはじめ19台。汎用コンバインはレキシオンと今年導入のアグリロボコンバインＤＲＨ１２００Ａの２台。また自脱型コンバイン１台や乗用管理機３台、アーサーリフトのキャベツ収穫機などを所有。今年から田植機の使用は止めて水稲は乾田直播のみにしている。一方でスマート農機もさまざま利用しており、農業ドローンＴ25や自動操舵を利用する。今後の挑戦として導入を検討しているのがロボットトラクタの複数台運用だ。「これまで輸入製品が主体だったが、円安や物価上昇が激しいので国産に着目している。その一つがロボットトラクタだ。人より機械の方が正確な作業を継続するので間違いない。１日中動かすことで効率化を図りたい。

MONTEFIORIレベラーとChallanger、大型モミサブローなど本州でも異質

マイコスの試験にも参加しているが、とにかく、いろいろなことに対応できるように実力を上げたい。そして、やってきたことをパートナーと共に数値に置き換えデジタル化することで標準化したい。農業はこれから大きく変わる。いろいろできるノウハウを貯めて対応力を高めたい。誰でもやることをしても生き残れないし、変わらないと生き残れないから」と話す。そうした中でスガノ製品はプラウ、直装レベラー、けん引レベラー、スタブルカルチ、サブソイラ、バーチカルハロー、カットロータリー、サイドカッター、スプリングハロー、そしてエルモのディスクハローを所有する。「スガノ製品は日本の圃場に合わせた感じが良い。プラウとサブソイラ、スタブルカルチ、レベラーは外国と同じものは無いので。開発本部長の波多野君が奮闘して頑張っているね。とはいえスガノには良い製品を作り続けていってほしい。さらにマーケットイン志向でアジアへ進出して、量産で低減したコストをユーザーに還元してもらえれば言うことないね」とエールを送る。そんなスガノ製品との出会いは60㌶規模の頃、先代の父と三重の実演会を見て１９９６年にプラウとレベラー、サブソイラを、１９９８年にＣｈａｌｌｅｎｇｅｒを導入。「当時は土づくりより作業が早く終わって好印象だったけど、今は輪作で良い土にすることを心掛けている。麦大豆コーンはスタブルの浅起こしで、スプリングハローで砕土、プラウは水稲の均平前と馬鈴薯・キャベツ前のみ。住商アグリと土壌診断で輪作・作業体系を変えながら数値化することで見えてきた」とのこと。将来に向けては、乾燥・調製・物流、ＢｔｏＣまで拡げて売上を伸ばしたいと話す。多様な職務を用意して、社員の得意を活かして伸ばす構想も。日頃の研鑽とノウハウ蓄積、技術の進歩、パートナーのレベル向上でさまざまなことの見える化を継続する高木さんからは、農業を着実に進化させている印象を受けた。

北陸東海近畿土を考える会

いかに儲かるかを模索

機械に留まらないテーマで

全国６カ所の土を考える会の中で、北陸東海近畿土を考える会は経営マインドが強く『機械よりも、いかに儲けるか』が最大の関心事になっているのが異色と高木会長。農業経営は、良いものを１キログラムでも多く作り、１円でも高く売り、いかにしてそれを安く作るかが課題との信念は取材中の言葉の端に出ており本質的な農業経営者の目線を感じさせた。そのためにも米30年、40年先の持続可能な畑づくりの原理原則が土づくりであることを強調する。北陸東海近畿土を考える会には、そうした思いを共にする40代を中心とした60人規模の会員が参加する。

今年の夏季研修会では『経営規模を拡大する農業経営の処方箋』と題し、ヤンマーＡＪや東海近畿クボタ、スガノ農機による同社圃場での現地研修。

場所を海津温泉に移して豊田通商・ゼンショーＨＬＤ、住商アグリビジネス、コルデバ・ジャパン、ＢＡＳＦジャパン、東神電気、日本メイズ生産者協会による講演の座学が行われるなど盛りだくさんの内容で53人が参加。毎回役員会で話し合いテーマや中身を決めているそうだ。「今回は、見える化と数値化を中心に盛りだくさんの話題を入れた。夜の情報交換も活発だった」と高木会長。会員同士は非常に親密で、機械・施設のシェアや苗の補完も行っているそうだ。北海道土を考える会の会員とも行き来があり地域を超えた機械シェアの話もあるそうだ。そうした中で全国の土を考える会の開催情報をシェアする提案をしたのが高木会長だ。「全国各々の土を考える会でいろいろ企画しているのに、その情報が伝わってこないのはもったいない。地域を超えた案内を共有することで、相互の交流を拡げたかった。農業は世代を超え、地域を超えないと生き残れないと思う。まず会って交流するのが大切。基本的に情報を出しあう人の集まりで、同じ目線を持った遠くの人の話は面白い。今後は旅行を兼ねて行きたい」と話した。そんな高木会長も入会以降、全国の農業経営者と交流を繰り返した。その活動を通して尊敬するのは、本質的な話で一丁目一番地を間違うことのなかった勝部征矢さんと、挑戦し続けている青森県つがる市の木村慎一さんだ。土を考える会を通して偉大な先人の背中を見てきたから今がある。「土を考える会は、常識に囚われないで、軽やかに農家の基準を超越していく人達の集まりだね」と締めた。

夏季研修会には53人が参加